

絵巻巷談
ジョン・シルバー

山手線の長いホームをジョン・シルバーが征く。おまえにはもうナイフも船も、めざすべき島もない。シルバー！
おまえが還る時、それは白いアスファルトに黒バラが咲く年だ。
宝島を忘れたジョン・シルバーが浅草の弁天湯に就職したのは、確

かロングロング・アゴーの昨日のことでしょうか。——足の不自由なシルバーは、よく番台から転げおちたけど、今や、女湯にオカマが潜入するのを事前に発見するほど、番台姿も板につくようになりました。

うららかな日々がつづき、事件といえは、今日も三叉路で犬が轢かれたことと、恋女房の小春が五度目の子を墮ろしたことのほか、何もありません。

午後二時の弁天湯に行くならば、諸君はきつと見かけたに違いない——番台のシルバーに寄りそった

女房の小春が、園マリの「夢は夜ひらく」を口ずさみながら、お茶の水で買ってきた純白の義足を纏っているのを。またある時は、「風呂賃を上げやがって、この野郎」とお客に怒られているシルバーと、その肩にとまったハク製のオウムを——。

それは本当にシルバーであったかとお思いでしょうか？ かの十八世紀の七つの海を股にかけた不敵な海賊なのか。シルバー、お前の義眼と義足は、ダテにつけているのかと。

果たしてシルバーの片目と片足は、ダテやスイキョであったらうか？

しかし、人々の寝静まった時、裏窓から射し込む月光に照る白いタイルとカランの影に立つシルバーが見つめていたものは、青い海のペンキ絵の彼方であったことは、小春さえも知りません。

～死人箱にゃ七四人

それからラムが一びんと

よいこらさあ

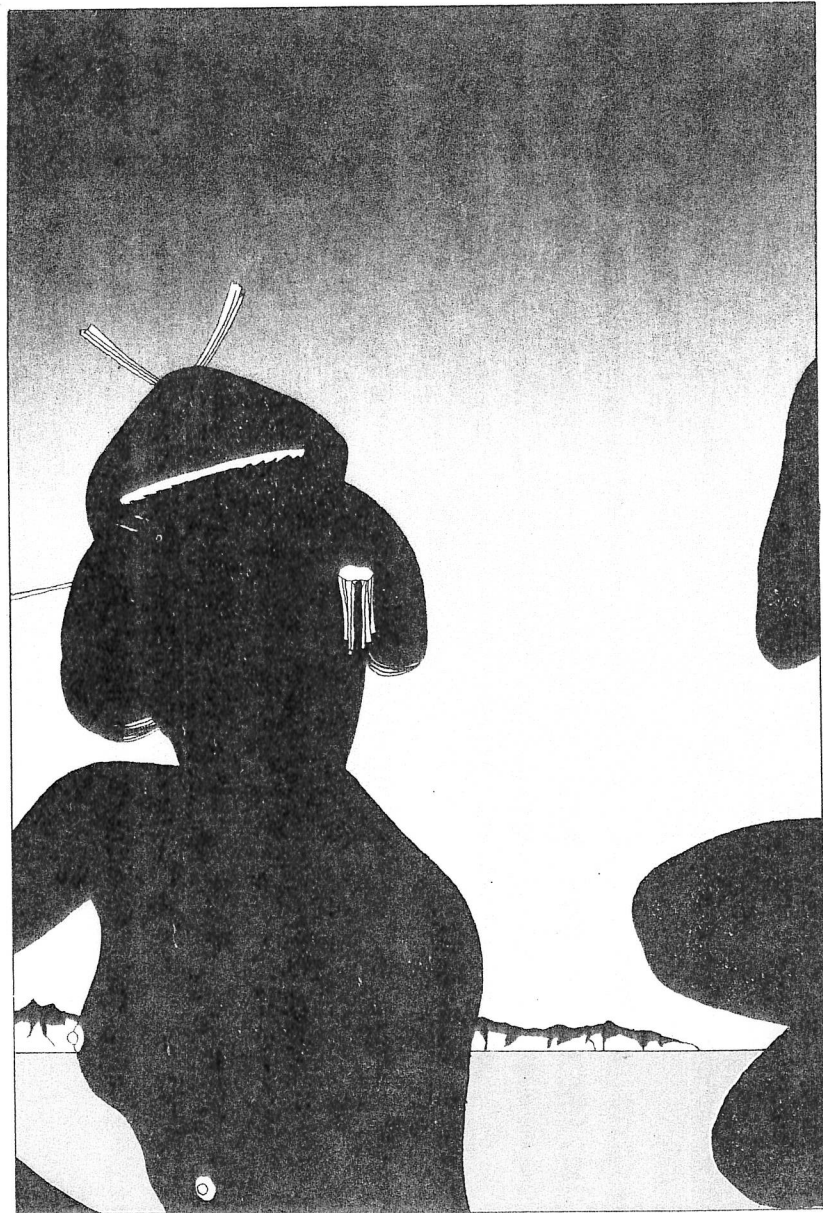
残りは悪魔が片づけた

七五人で船出をしたが

帰ってきたのは只一人

よいこらさあ

それさえ行方はわからねえ



海の緑のむこうからそんな歌が聞こえてくるようだ。シルバーはニヤリと笑って陸いた。
「生き残りはここにいらあ、おいら、もう海賊ではねえ、庶民なんだ」

その時、

「やばいぞ、シルバー！」とけたたましく叫んだ者がいる。シルバーは青くなって肩の上のオウムを見上げた。ハク製のオウム船長の目はビー玉で出来ている。そして、腹ワタはワラクズだ。いつか、オウム船長がシルバーを海にさらってゆくのではないかと案じ、女房の小春がこっそりひねり殺した筈の「船長」がまた叫んだ。

「やばいぞ、シルバー！」

その時、シルバーは、何がやばいかを察した。壁にはめこまれた鏡の向こうに、一本足のもう一人の海賊がじつと立っているのを。

「シルバー、マッコーが死んだぜ」とそいつは言った。

マッコーとは、思春期のシルバーに「性」の何たるかをじっくり教えてくれた巨大なる白鯨である。

「マッコーは死なねえ」

「あの姐さんはくたばっちゃまったよ。お前によるしくとよ。シルバー、もう海にゃ誰もいなかったぜ」

わが心のうちをかくも動揺させるその男の言葉にととう頭に来たシルバーは、一本足で鏡をぶちこわした。すると男は、今度は反対側の鏡に現われた。

「無茶するなよ、シルバー。お前らしくもねえ」

「お前は誰だっ？」

一歩にじりよったシルバーに、鏡の中の一本足はニタリとほくそ笑むと高窓から射し込む月光に顔をあげた。

「シルバー。おいら、あの頃の、あの頃のシルバーだぜ」

それこそ、海の汐に灼かれた刀傷のあるシルバー自らの顔だった。只、今の彼と異なっているのは、女房の小春がつくってくれた純白の義足ではなく、さびた鋼鉄の義足がキーキー鳴っている、そのことをのぞいては、それは確かにシルバーであった。

「昔のおいらなんて過去の遺物だ」とシルバーは言った。

「でも遺物が生きる時間だってあるんだぜ。よお、シルバー、お前も水くさいケチな男になったな。過去の遺物がこの世界に闖入したところで、何でも引き受けるような男だと思ってたのに……それが、庶民根性というものかな。女房をもらうと男はかくの如しだ」

「小春のことは言うな」といささか赤くなってシルバーは言った。

「シルバー、てめえ、まさか女房の股ぐらに『宝島』を見つけたんじゃないだろうな？」

「関係ないじゃないか」

と言ったものの、シルバーは何故か自信がなかった。二度と帰ることのない「宝島」を自分は確かに女房の温い股ぐらの彼方に見つけてしまっているのではなからうか。もしそうならば、俺の男もほんの少しスタレタなど思わないわけではなかった。

シルバーのそんな心のうちを知ってか、鏡の中の一本足もうつむきかげんでぼそりと言った。

「帰ろうかな。……シルバー、本当に、もう海にゃ誰もいなくなっただぜ。姐さんがよ、一言お前に伝えてくれて——」

「何を？」

「シルバー、もう一つの“宝島”を探せ——って」

そんな遺言は今の一介の庶民シルバーにとって、最も恐れていた謎々ではなかったろうか。徹底的に“性”の技巧を伝授してくれたマッコーの姐さんには義理と面子めんつがあることだし、一瞬シルバーの眼前は真暗になった。鏡の中に目をあげたとき、あの一本足はもういなかった。月は高窓から姿を消して、ひた打つ湯舟の水と外を走る牛乳配達自転車のほかに彼を呼び止める者は誰もいなかった。

へ頃は八月半ば頃、夏とはいえど肌寒い

浅草の夜だった、

ガラタ小路を三つ曲がりゃ

すぐに目につく弁天湯

男一匹シルバーは

今しも海のペンキ絵の

彼方をぐっとにらんでいた。

おお、たしかに聞こえる海の音

岩にだけける男の意気地

海が呼んでる オウムがわめく

シルバー、海へ行け

それぞ男の生きる道

待ってました。分かったよお！

おいらは行こう、今行くぞ。

犬も鳴かない浅草の

夜の小路をシルバーが

片足ふみしめ、今ぞゆく

外には円いお月様

しかし、一寸待ってちょうだいな。

しばしシルバー考えた

『海はどこにある？』

海は今でもあるのだろうか。

捨てた海と捨てた宝島ではない

もう一つの海と宝島は

忘れられぬどんな海の向こうにあるんだ……

オウムの船長、教えてくれろやい』

オウムはハク製

目玉はビー玉

海を捨て、記憶を捨て、

今また、妻と安住の場を捨てた

不憫の一代シルバーが

巡り巡って経る道は何処

マッコーの遺言に通ずる男の道は！

それにしても、シルバー

お前には海がないんだ――。

ちょうどその頃、二階離れの四畳半に、一人寝ていた女房の小春は不吉な夢を見た。寝返りながら叫んだ熱っぽい彼女の寝言は向こう三軒両隣にまで響いた。

あれは雷の音？ それとも船の碎かれる音かしら、シルバー！ あのオウムがあの時ささやいたに違いないのです。シルバー、おい、銀色の海賊、おいらは海にゆくぜ。山手線の長いホームを歩きながらあの人はあたしにそう言ったんだもの。――おい小春、おれはまた出かけてゆこうと思うんだ。冗談だろ、シルバー？ おまえの出かけてゆくところなんてもうどこにもありゃしないんだ。あの人は足を洗ったはずだった。海の島のことなんかてっきり忘れて、風呂屋の番台に腰を落ちつかせたと思っていたのに。

これは夢なんかじゃない、昔の旅なんかではないんだ、とあの人は言った。灰色のホームを先へ先へ、もっと向こうへ向こうへ。つんのめるようにして行ってしまった。只、何故かしら、何故かしら？ あの時、オウムの船長が「やばいぞ、シルバー」って叫んだのは。シルバー、おまえの今度の船出はきつとやばいんだ。でも船はあ

りゃしないじゃないか、おまえ。

おまえをしたうオウムはハク製だし、仲間だつていやしないんだよ。あいつは一人で行くつもりでいたんだ。あいつは一人で行くつもりでいる。あいつは一人で行っちゃおうと言うのかしら。どこへ行っちゃおうって言うんだよ、ビッコ！

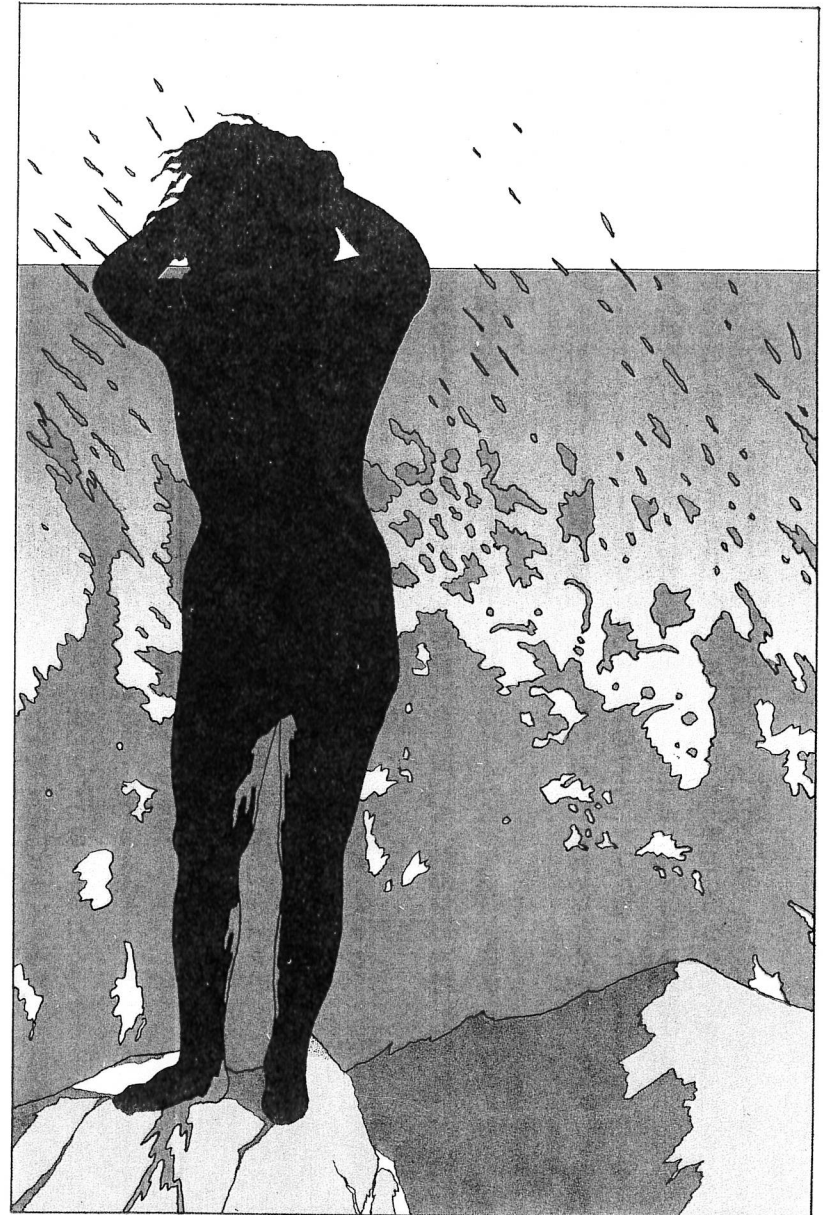
小春は突然目がさめた。寝汗が寝巻のえりをじとりとさせている。小窓が朝風にパタパタ鳴っている。となりに寝ているはずのシルバーが居ない。もぬけの殻の寝床をさわってみると冷い。そして分厚いシルバーの胸の代りに純白の義足が脱ぎすてられているのを見て小春はギョッとした。

あの夜以来、シルバーは、海への入口を探しつつづけたが、それは東京湾にも、釣堀屋の水槽にも発見できなかった。金も使い果たし、靴も破れたシルバーは、自らに言い聞かした――「もっと具体的に！ 具体的に対象を見つけないくちや……」と。

そこで彼のやってきたのは、上野の博物館の前庭に陳列してある鯨の巨大な白骨の前であった。シルバーのその時の心境は諸君ももう察したとおり、マッコーの姐さんとの幼児体験をふたたび反芻したいという願いなのである。シルバーは、鯨の尾骨に足をかけて、巨大な白骨の背にまたがり、ズボンのチャックをはずした。

かつてコンゴで、棒でぶちのめし鍛えた、あの黒ずんで、極端に逞しい一物をしっかりと支えたシルバーは、次の瞬間、「姐さんっ――」と唸るや、銭型模様の鯨の股骨に向かって突進した。

さすれば



「東京湾の汽船が一斉に汽笛を鳴らすだろう。

屋間でも流れ星が落下するだろう。

そして、かつて姐さんを海底でねじふせた時のように

どこかで死んだ姐さんが、竜巻のような叫びをあげるだろう。

そしたらそこが俺の海に違いない。」

ところがシルバーの期待を裏切って、何故か、白骨の模型はガラガラとくずれ落ちた。

シルバーはがっくりと首うなだれた。しかし、ズボンからはみ出ている禿鷹の頭のように逞しき一物はそのままだった。ちょうど居合わせたアメリカ観光客の御婦人たちは、卒倒した。逸早く事を聞きつけた博物館の係員が殺到したので、シルバーは一目散に走った。しかし、相当シルバーはあわてていたので、恐らく、ズボンのチャックを閉めるヒマがなかったのではなからうか。

シルバーは走った。義足を補足するために、両手まで使って走った。鶯谷の坂をかけおり、下谷万年町を抜け、お腹が空いたので駄菓子屋でチーズクラッカーを一つかっばらった。そして、いつしか彼は赤坂の高速道路を走っていた。途中で雨が降り出した。どしゃぶりの雨だった。

泣くこともできないシルバーは、それを自分の涙だと思い込んだ。それから、

「マッコーは本当に死んだんだ」と呟いた。

高速七号線のカーブにさしかかった時、行手の向こうからシルバーを呼び止めた者がいる。ふりしきる雨の中でミノ虫のようにガラクタを背負いこんだその男は、とうもろこしのように黄色い歯を見せ、シルバーの前に立ちふさがった。

「君、僕は裸足です」

なれなれしいその男はそういうと両手をパッと開いてみせた。その手は屠殺人のように赤かった。見れば不思議にも、背広の上にドテラを着て、その上にまたタキシードを羽織っている。そればかりか、国電の古い切符をびっしりとはさんだ帽子の上にハチ巻までして、顔は、メガネの上に眼帯をしているではないか。そしてバンドには「平凡パンチ・デラックス版」と「少年マガジン」をはさんでいる。

「君、僕は裸足です」

また同じことを言って、シルバーに、にんにく臭い息がかかるほど近くに迫った時、開かれたその男の手のひらにぬりたくられているのが血であることを、シルバーは確認した。あまり歩きすぎて、パンツが股に喰いこんだらしく、尻をもじもじさせて、彼はまた笑った。

「とてもきれいなハダシだよ」

「だからどうしたってんだ」

「こんなことはめったにあるものではないのです」

「……………」

「こんなに厚いブタ皮のブーツをはいて地下鉄にのったり雨の銀座をつっぱしっておりますが今はほら、ハダシでこっそりと立っております。とても軽やかに、品のよい足つきで、ここにこうやって。

私は風でありました。

何の味も臭いもない、只の通りすぎてゆく風でした。日曜日の午後から日曜日の午後にゆく、おっとりとしたため息のような。…それは美智子妃のあその毛をそよがせることさえできなかったでしょう」

そう言い終わると男は、流暢な言い回しにも合わず「デヘヘ」と笑った。極めて多量のメタンガスを体中の穴から放射するのか、シルバーは、その男を直視するのに難儀した。

「しかし、私はもう風ではありません。この手をごらん。私は今晚、お父さんを殺してきました。お母さんも殺してきました。義理のお兄さんも、一番ちっちゃな妹も、となりの大工の留さんのノミで一ぺんにやっつけてきました。君、人を殺すってのは簡単なものですね。病院の院長先生も、もうすぐ死ぬでしょう。妻の小夜子は、私を見て首をつりました。恨みも憎しみもなかった一家なのに……只ね、夕飯のおかずニンジンが入っていたのです。私、ニンジン嫌いだからねえ。それで、それがきっかけで——。

君ッ！ 私は苦勞してきました。それはそれは苦勞してきましたのです。私が風でなくなるために——。私はどんなことでもやってきたつもりです。でもこうやって、裸足でこっそりと立ち、親兄弟の血を体中にあびた私は、やっとな風ではなくなったようです。君、もし、差し支えありませんでしたらば、ハンカチを、ハンカチを貸していただけますでしょうか？ この罪の手を拭かなくてはならないのです」

生まれてこのかた、ハンカチなどというシャレタものを持ったことのないシルバーは、いささか困った。すると男は、急に威丈高となり、

「ないとは言わさないぞ、おまえっ」と怒鳴って、口の中に手をつっこみ、入れ歯をとりだすと、その不潔な凶器を、シルバーの頭上にふりあげた。

「待て、昂奮するな」シルバーはそう言うと、しょう油のシミだらけの手拭いを手渡した。男は受けとろうかとするまいか考えていたが、決心したらしく、その手拭いをひたたくって手のひらの血をぬぐった。

「ありがとう。——白いハンカチ……まあいいや……白いハンカチが赤くなってしまいました。どうもありがとう

う。——私と君は、やっとな他人ではなくなりましたね。だって君、町でお会いしても、私のことを思い出していただけるでしょう？ 君、しばらくでした。ほら私は、ハンカチをお借りしたいつかの者でございます……と、

私は君を呼びとめることができます」

男はそう言うと、感動のあまり、シルバーの胸に顔をうずめ、そしてシルバーの手拭いを素早い手つきで自分のパンツの中に押し込んだ。

「君、私達はまだ風ではあり得ないでしょう。私はますます、具体的な存在の範疇に接近しつつあるのです。君は知っているか。かの名言を。——『お前が何者か？』と問われたら、今己れは何とつきあっているか、と考え

よ」君、一杯やっかか？」

この男にかかずらっていたら、朝になってしまおうと思ったシルバーは、別れの機会を早く見つけようとした。

「残念だが、一杯やってるひまはねえ。俺、行くところがあるんだ」

「そうか、行くところがあるのか。しかし君、網走番外地には行かない方がいいぞ」

「そりゃ、おめえのことじゃねえのか？」

男はシルバーの言葉に動揺したのか、身ぶるいして10メートルほどあとずさった。(途中で一度転んだ。)そして六大学の応援団も敵わないような大声で叫んだ。

「網走番外地には、私は行かないっ！ 君、分るか？ 私の体は今、ネロ皇帝もかくやと思われるほどの罪の血で一杯だ。しかし、この私をFBIも007も世界第三位の網羅を誇る日本警察さんも、捕えることはできないだろっ！ 何となれば、——ごらん」

男はそう言って、体中にまつわりついているガラタタを披露した。

「この入れ歯は死んだおばあちゃんのものだ。この国電キップは昭和三十一年六月一日から八月三日まで、赤羽から船橋までの距離をキセルしたものだ」

そしてあげくのはては、シルバーの手拭いをパンツの中からとり出し、

「これは、今日、君にお借りしたハンカチ……分るかね、君、私は、こんなに“モノ”にとりかこまれている。こんなに具体的に、具体的なモノに……ね。しかし！」

その声がまた一段と大きかったので入れ歯がとびだした。

「しかし、私には固有名詞はない。誰が“一本足の男にハンカチを借りた男”を指名手配することができようか。私が世界の果てまで行ったとき、私をとり囲む懐しの物に満ちあふれて、誰も私を発見することも、逮捕することもできないんだ。私は物の陰にかくれてしまふからね。私はある時は入れ歯だ。ある時は、血だらけのハンカチ。また、ある時はトイレット・ペーパー」

北風とどんよりたちこめた雨雲に向かつて、勝どきのように、あの卑しき笑い声をあげているこの偏執狂が実は、健忘症であることにシルバーは気づいた。

「あんた、その時、本当に風になれるんだね」

「風に!？」

彼は余程驚いたのか、眼帯とメガネをはずしてシルバーを見つめようとしたが、不幸なことにそこには目がなかった。只、加山雄三の目だけの切り抜きが、眼窩の上にセロテープではりつけてあった。

「トイレット・ペーパーになびく風にさ。親殺しっ、行け! 網走番外地へ——」

シルバーはもう後を見なかった。弱い奴をいじめたような気がして後味が悪かった。まだ見ぬ海、もう一つの室

島を追って、シルバーは高速道路を駆けていった。

シルバーの姿が見えなくなっても、偏執狂はふりしきる雨の中に、枯木のように突っ立っていた。彼の足元には、おばあちゃんの入れ歯が砕け散っていた。

ところで、けなげなるわれらの婦おきな、かの女房小春はどうしたであろうか？ あの夜

以来、浅草の弁天湯に通う者の目に、もうふたたび番台から笑いかける可愛いえくぼと潤んだ瞳を見つけることはなかった。シルバー恋しさに流れ流れてさすらう鳥は、どこの巷で泣くのであろうか……

しっ、静かに! 小春の歌が聞こえる。

へ一人……

ひとりほぐれた恋千鳥

泣いて 笑って また泣いた

おぼろ月夜に 小指をからげて

誓ったあの人 今いずこ

生きるも死ぬも お前したい

だから あたしや 泣かないよ

観音様に願かけて、赤い鼻緒に旅姿。脇にかかえたヴァイオリン・ケース、中には